

光明第二号

一、狂風の手紙には事新しいことも出来にくいことも書いてはない。人の道が書いてあるだけだ。我らはたとえ三歳の兒童の口から出たのでも真理の前には頭を下げねばならぬ。道理の解っている者は皆だ。知っていて行わないのも皆だ。千知るよりも一つ行う方が尊い。僕は皆が知っていることを取り出して、行ってくれと頼むのだ。

一、自己を誇る者の言を聞くな。自ら謙遜する人の言は傾聴せよ。誇る者は卑しく、謙遜する者は尊いからである。

一、人の己を誉むるを聞いては、実に過ぎたることにても悦び誇り、己を誹るを聞いては、有ることなれば驚き、無きことなれば怒る。過をかぎり、非を遂げて、改むることを知らず。人皆その人がらを知り、その心根の邪を知って唱うれども、己独りかくして知れずと思えり。欲する所を必として、諫を防ぎて容れず。(熊澤蕃山)

巻頭の叫び

一、万世一系の天皇陛下を戴き、光輝ある三千年の歴史を有する大日本帝国に生をうけた我らは如何に幸福だろう。

1

一、我らにはこの万国無比の国体を守護し、帝国の国威を発揚し、人類幸福のために尽くす義務がある。

一、我らがもし目覚めないならば、鳥や獣とどこがちがおう。食物をたづねて生きている位は虫でもする。子を育てる位は鳥でもする。真に生き真に育てなければ人ではない。

二我らはたかぶらない。悲しまない。腹を立てない。我らが自慢する時、我らの進歩はとまり、価値は下つている。我らが悲しむ時、我らは弱くなり、怒る時、我らは醜く恐ろしくなる。

□「日誌を作つて書いていますか？」

△「どうも書く暇がないのでついその書いていません。」

□「日誌も書き、手紙も早く出し、自分の務もためないでする人がほんとに暇がなく忙しいのです。しないで忙しいという人はまだまだ務めなければ駄目です。忙しいと言つて遊んでいるのです。」

□「あなたは書いていますか？」

×「ハイ書いてはいますが書くことがなくて、毎日、起きた、食うた、仕事をした、寝た、と同じことになります。」

□「あなたは機械ではなくて人間でしょう。それならいくら毎日おなじことをしても心持はちがうでしょう。思うこともちがおう。毎日おなじ通りの良いこともすまい。人や世間の話もちがおう。する仕事や見る本も毎日おなじではない。そんなことを言うのはまだまだ目がさめたのではなくて、日のさめた夢を見ているのです。」

兄姉弟妹よ、皆様が「光明」を読み、「光明日誌」を書く時は心は正しく燃え、愛の温かさを知ることができよう。而してそこには僕の心が行っている。

小天狗の鼻

小天狗になるな。しんがとまる。

世の中には小天狗と申す不思議な者がいるということです。たいそう強い者かと思ふと、大天狗の前では青菜に塩の様になるところを見ると強いのでもなし、勇気があるのかと思ふと、いつなりと逃げられる仕度をしているし、馬鹿かと思ふと、何時も鼻をこんかぎり高くして、自慢らしく威張っているし、何時も赤い顔をして、おこっている。なかなかの小智慧があつて、人をだましたり、悪戯したりすることもある。何と不思議な者ではないか。

人間の中にもこの小天狗が多いということです。金が千円あればすぐ鼻の先に、田が一町もあればそれも鼻の先に、学問すればそれも鼻先に。着物があればこれも鼻先に、何でもかでも自分のことは皆鼻先にぶらさげて、思いきり鼻を高くする。ところが金の十円しかない者の前だけで、一万円もある者の前ではしほれてしまい、田の十町もある者の前では、こんかぎり力をおとし、真赤な顔して、怒ったり、はずかしかつて逃げて行く。強そうに見えたり、賢そうに見えてもそれはうわべで、空元氣ばかり。それでも時々小智慧をよく使つて、人をだましたり、困らしたり、おとしいたりする。他人の言うことなんか耳には入らない、自分が何でも一番と思つているから。人間も天狗になつたらおしまいです。天狗になつたら進歩はない。僕らはともすれば天狗になり易い。どうか気をつけて、僕やあなたは天狗にならない様にしましょう。世の中に天狗の多いのを見なさい。人間が小天狗になると、だんだん退歩をはじめし、失敗しはじめる。(つづく)

若き同胞よ (三)

六 怠惰は青年の自殺

僕らが尊いのは青年だからである。何故青年が尊いか。青年は未知数であつて努力すれば如何なる大事業でも出来、社会国家を強く美しく、楽しきものにする事が出来るからである。国家社会は如何なる者をも要求する。そして、其の全てのもものは、僕らがいなくては如何とも仕方がない。百姓がいなければ生きて行かれぬ。大工左官石工がいなければ住むことが出来ぬ。商人がいなければ世の中は病人の様になる。官吏も医者も教育家も僧侶もその他幾千百の職業があればこそ、完全に、社会は動いて行くのだ。そして、それ等の全ては僕ら青年でなくて誰がして行くのだろう。

僕らはその内の何かに進まなければならぬ。そうだ！何かをしなければならぬ。それなら、まず何に進むかを定めなければならぬ。自分の性質や事情やによつて、定めねばならぬ。そして、それも定まつた。愈々これからが奮闘だ、努力だ。これからの僕らには、忠実と熱心との外には何物もない。しかもこの忠実と熱心とは、自分のためではなくて、社会と国家のためである。

「何、自分のためでなくてやれるかい」だから駄目だ。その考えこそは僕やあなたを価値のない人間としてしまふ。こんな考えでいるからこそ、自分のためにならない時には、手を上げるのさえ大儀になり、人が見なければ横着を出来るだけし、面白いことがあれば自分の務や仕事もしないで遊び、他人のためになることなら爪の垢ほどしたことがない。これが即ち青年の怠惰である。怠惰は恐ろしい病氣である。しかも4容易になおらない病氣である。否、これこそは青年を自殺さすべき毒藥である。この毒藥たるや実に甘い蜜の様に、砂糖の様に甘い。味を知つたらやめられない。そして、この甘い毒藥を食うたびに、精神も身体も衰えて、遂に、何の用にもならなくなる。

僕やあなたがもし、怠惰になれば、その前途には光明もなければ、意義もない。そして「真の人」ではない。即ち自殺したのだ。おいおい、若い弟よ、今、今から目覚めなければ知らん間に死んでゐるぞ。世の中には、「とてもどうもならん」としか言えない自殺者がそこら中にゐるではないか。

じつと考えて見ても解る、自分に都合のよきそうな時だけ勝手に少しづつ仕事をし、あれは大儀な、これは嫌。今日は雨降り。今日は寒い。今出るのは暑い。之をするつとめはない。あんなにしても礼も言わん。こんな具合に勝手な理窟をならべていて、働きもせず勉めもしないでいて、よい果報がむいて来るだろうか。こんな屁理屈を言つていて嘆いてゐる奴こそ、この上もない哀れな動物である。昔から、一寸でも人より抜き出でた者は皆こんな横着理窟の代りに、今日は雨が降つて人の休む間にこれだけしよう。人が来ない間にこれだけしようと、努め努めた人なのだ。怠惰で事の出来た者は一人もない。要するに、人は何かしなければならぬ。するには努力でおし通せ。怠惰は僕らの自殺である。自殺者に、真の人間の息のかよう道理はない。

七、志は天にとゞけ手は地をかけ (上)

この言葉は明治初年における大学者福沢諭吉先生の言われた言葉を借りて来たのだ。僕らは常に、今よりも高いところに目をつけていなければならぬ。それが理想だ。決して今の自分にのみ目をつけて、これで好いと安心してはならない。何時でも天にとどく様な望みがなくてはならぬ。一二三つよいことをしたので満足してはならない。百円お金がたまつたのを自慢してはならない。もつともつと大きなところに理想をおかねばならぬ。人に使われている者も一度は独立して人を使え。理想のない者は進歩発展はない。「貧しい者は幸である。」と度々僕が言った。何故貧しい者が幸だろう。貧しい者は自己の現在の上の身に満足することが出来ず、おのれ一度は身を立て家をおこさずにおこうかと何かの機会に発奮し、理想が心の中に燃えていて、それに突進するからである。

一度僕らが何かに刺戟されて、志を立て、理想に向つて光明が見えたとき、僕らは進歩にも向上にも出発しているのだ。今日一日今日一日と大きな苦にも出会わないで暮している者は、何時迄も心に発奮もおこらねば悲しくもない。その小さい幸が害になつて、あたら青年期を何も為らないで面白おかしく働かずに、一生涯の仕度もしないで暮してしまう。この何にもかえられない青年期、一刻千金よりも尊い青年期を馬鹿話や、金使いで費している間に、大勇猛心をおこして立つた貧しい正しい青年はずんずん進んで行く。三十歳になつた。ああ僕も何かしておけばよかったと、過去の夢の様な享樂がさめた時には、もう仕方がない。理想に心がおどる時がなかつたからだ。

昔から、精神界にもせよ、物質界にもせよ、平凡な者よりぬけ出でて名をとゞめ世を益した者は皆何かの折に理想が心に燃えたのだ。頼山陽は十三才の時には天をあおいで、どうして後世に名をのこす人間になろうかと言つて詩を作つたではないが。わが親鸞聖人は御年九歳の時、一念発起墨染の衣まとう身となられたではないか。二宮金次郎は十三四才の頃から手に大学一冊をはなした事がなかつたではないか。「やろう！」と一度の決心もせず、人間になろうと一度目覚めもせず、志も希望も光明もない。何等とりえのない哀れな青年がいはいないか。駄目だぞ駄目だぞ。(続)

処女の誇

玉にも命にもかへな!

若い妹等よ。貴女は処女である。尊い誇るべき処女である。あゝあの緑色の日覚めるばかり、奇麗な深山の奥の谷の草むらの中に露を玉の様に光らして、尊くにおうている白百合を知っているでしょう。妹よ、処女なる妹は丁度あの白百合の様に上品で尊く美しく崇いものである。そうだ、処女の体の中には純潔な汚れのない血が流れている。妹よ実にその尊い処女である。だから心の中にも一点の曇りがない。しかし、しかし、もし貴女が汚れたる心になり、貞操を失なつた時には、昨日まで榮華と歡樂に酔うていた天人の五衰があらわれた様に、妹の心もその尊い体も今は穢れたる、卑しき肉の塊と変わつてしまわねばならぬ。妹よ、妹よ、もし真に尊く活きようと思えば命にかへても貞操を守れ。貞操を正しくすることは、貴女の生命より重い。生命は棄てても貞操を正しくするところに貴女の尊さがある。人に取られた銭は又得られよう。しかし一度失つた「処女だという尊き誇り」は二度と取りかえしはつかない。世には処女の尊ささえ知らない者もいる。知つた貴女は命にもかえないと誓え。

愛は貴女の生命である! 愛は人生を美化し浄化する! (三)

世の中で一番哀れな者は、人を愛することが出来ないで、親が悪い、子供が不孝だ、夫が無情である、姑が邪見だ、友達に信がないという者である。自分の周りの者が悪ければこそ私たちは心から愛しなければならぬのです。ほんとの親が死んで他人を親としなければならなくなつた人は、その継母がもし悪い人であつても決して、継母だからと思わないで如何に辛くあたられてもその心が正しくなるまで母に眞実の愛をさゝげて見なさい。何時かはきつと「あゝ! 私が悪かつた」と眞実の愛がとゞいて、目の覚める時がある。如何に無情な夫でも貴女が強く長く眞実の愛をさゝげたらきつと心から貴女の愛を知つて夫は救われ幸福な生活に入ることが出来る。

世の中の多くの女子は、夫が悪いと見たら、青筋うかべて怒る、泣く、わめく、おどす、その力で夫の心をなおそうとしたり、腹いせをする、それでは夫の心を益々鬼にする。姉は姉で「妹が悪い」、妹は妹で「姉が悪い」と言っているのは、姉妹共に悪いのです。貴女が悪い妹をもてば「妹は可愛そうに、あんなに悪かつたら一生人に面倒がられよう。今の間に直してやろう」と、がみがみ怒るかわりに、涙をもつて救いなさい。妹が貴女に悪くするのは貴女もやはり悪いからです。

貴女を生んでくれ育ててくれ、教育してくれた親をさえ愛し得ないやうでは、もうとても人にはなれない。親は子にむかつては絶対の愛をそそぐのに、子はその絶対眞実の愛に、鬼の心で向かうとは何とということだろう。乳飲み児の時、一日ほつておかれたら貴女は死んでいなければならぬ。一人前の人間になるまで何度親を泣かせたか知れない。ああこの天にも地にも唯二人の親を愛し得ない者が、どうして世が正

しく渡つて行けよう。人になれよう。寝ても起きても別れても親を思い、親を拝み、親を愛せよ。愛に目覚め、人になる第一には親を愛せよ。

かくの如く貴女が夫を、姉妹を、親を、真実に愛すれば、貴女は家庭を極楽にする尊い身になったのである。その時の貴女は愛をもって家庭を救うの仏となり、悪をはらうの神となったのである。その幸福は何物にも及ばない。

税所敦子は京都で生れて、柔かく風にもあたらず、辛いこと一つしないで大きくなつて、薩摩の藩士のもとに嫁入つた。薩摩は人の心の荒いところで、とりわけその姑はなさげのない人であつた。敦子が嫁に行くと、その姑は「おまえは京都生れで、はでで困る。」「食物が贅沢すぎる。」「そんな着物をきないでこれを着よ。」「なで掃きをしたことがないようではないかん、下女と一緒に雑巾を使え。」「肩をさすれ、足をもめ」としたこともない様なことや無理なことを言いつけられても「有難う御座います」の一点ばりで真実の親につかへる様な愛をささげた。初め税所敦子に辛くあつた姑も、遂には敦子の愛に泣いて「わしが悪かつた」とあやまつて、後には、自分の子のやう可愛がつた。薩摩藩主島津公のところに出て仕へることになつた時「嫁を取られるのは片手をもぎとられるよりも辛い」と言つて泣いた。

これだこれだ。一家を極楽の楽しみにするのは貴女の愛の力を外にしてはない。だからまず愛の力で家内を救え。(つづく)

『雁の羽音』の中から

(1) 「牛おう童」君に。

君の手紙を見ると、つまり、君は「人に使われている身で、今まで辛く使われると思つて大儀であつたが、それは自覚して面白くなつた。約束以外の仕事をするのも馬鹿らしかつたが、それもしなければならなくなつた。しかしそれなら、一生涯ここにいなければならないことになりはしませぬか。」というのだね。ちがいます。違います。まず、前に出している「理想は天にとゞけ、手は地をかけ」を読んで見よ。君は今なにの為に使われている？ 何のためにそこにいるのか。その事業を習うためか。金を得るためか。金を得るためとするなら、何程金を得て、何をしようと思ふのだ。君は目覚めていると言ふが、目覚めなければならぬことを知つたのだ。

安田善次郎が「今に見ておれ、千両の金をためて見せてやる」と志を立ててわずか二分と八百文(五十八錢)の金を持って江戸に出て、まず玩具屋に小僧となつたが、何十人の店の者がぬぎちらす下駄を皆そろえていた。「何故馬鹿な仕事をするのだ」と他の者が言えば、安田は「店がきれいになるから」と言つて相変わらずおしめていた。それだけでない。一切主家のためならどんな事でも骨身をおします働いた。人の仕事までした。こんなにする約束ではなかつたとか、こんなにしてやるのに主人が見てくれない等と思つたことはないのだ。ただ働いたのだ。

それなら、わしはここに一生おろう等と思ふたり、本気になると言へば、ここに一生いなければならんのかなどと思つたことはあるまい。君に真に自覚があり、将来へ

の理想があり、そして君自身をふりかえって見れば、そんな矛盾はおきないはずで
す。よく考えなさい。(又会ってくわしく)

激語欄 時間は金より尊い。

□ 愛したい、救いたい。慰めたい。導きたい。それ以外に狂風の心にはありません。人数の増すにつれても、顔を知らない悲しみ、身の上を知らない物足りなさが、しみじみと感ぜられます。親がいないで寂しい方があれば、親のある方以上に、にぎやかにしてあげたい。人生の無情に泣く人があれば、愛の温かさを知らせてあげたい。弱い者、悲しい者、衰えし者、哀れな者、寂しい者は、皆集れ！ 僕らは兄弟姉妹になろう。光明の傘の下に集った者は、強められ、清められ、慰められる強い力と歓喜とを得るだろう。身の上を知らせて下さい。心の悶えを言つて下さい。僕は兄弟様や弟妹の様子を知る嬉しさを毎日待っています。

□ 一ヶ月の間に来た皆様からの手紙が一百通あります。その中には何が書いてあるでしょう。涙にくれた懺悔や、一人でつゝみ得ない喜びや、不幸に泣きたい様な告白、哀れな身の上、努力をちかつた手紙、不審をとうもの、今から先の相談等であります。

待たるるものは皆様の手紙であります。毎日来る何通かの手紙を見る時位嬉しいことはありません。「僕は一生先生の所にいたかった」と読んで熱涙をのみ、「嬉しくて楽しくて……」と言われては、共に嬉しくなり、「悲しうございます」と見ては涙が先に出る、「先生がいて下されば今の辛苦ものびます。」と書いてあつては有難いと思ひ、「私は悪い人間でした……」と心からの懺悔を聞いては、よくそんな気になつてくれましたと礼を申します。

□ 光明を見てキリストだと言う人がたくさんあります。何というわからずやでしよう。支那の孔子は仁をとなえました。釈迦は慈悲を説き、キリストは愛を教えました。仁と慈悲と愛とどこがちがいます。皆、愛の名の変わったものではありませんか。私は宗教を説くものではありません。愛の尊さを叫び、人生を幸福にしようと言うのです。心ちがいが無い様に。

□ 世の中では、何かしようと思えばそこらの人間はすぐ悪く言つて反対しようとするものです。馬鹿とも罵りましょう。狂人だとも笑います。あるいは又、悪人だと恐れられ、偽善者と見られます。真面目になれば君子ぶる。お金を大切に使へば吝嗇とまちがえられ、人一倍勉強すればカマボコと笑われたり嫉まれたり、おとなしければ意気地なしとまちがえられる世の中です。僕らは正しくて、真の人になろうと勤めているなら何と言われても好いのです。たとえ百千の人は皆あなたの敵となつても、狂風だけは、あなたを信じます。そして、慰め励まし祈つてあげるでしょう。思い置くこ

となく、正しく、勇ましく、嬉しく、懸命に、理想に向ってお進みなさい。そこには、きつと、この兄の心が飛んで行って、あなたと一緒にいるでしょう。又考えなおせば、世の中が悪く言い、邪魔をすればこそ、それが試練となつて、僕らが玉か石かわかるのです。ああ嬉しい。

□ 団員の中には、悲しき人、哀れな人がたくさんある。同情なさい。同情の嬉しさに、泣かせてあげよう。

□ 光明団の名簿を差し上げます。毎月十日までのをお知らせします。どうか益々ご尽力をねがいます。近い内に「光明」も印刷にしたいと思っています。今活版屋と交渉中です。もし印刷すれば、費用も少しはたくさんいるかも知れません。月五銭や六銭は喜んで出して下さることでしよう。お願いします。

□ 播磨校長先生が、本団のためにたくさんお金をお出し下さいました。謹んでお礼を申し上げます